

# やまぐち景観セミナー基調講演 「日本人の景色」

京都大学大学院 樋口 忠彦 教授

## 日時・場所

- ・ 平成16年3月17日(水) 13:00～
- ・ 山口県セミナーパーク研修室



## 樋口忠彦氏のプロフィール

- ・ 1944年埼玉県生まれ。
- ・ 東京大学工学部土木工学科卒業、同大学院工学系研究科博士課程修了、工学博士。
- ・ 新潟大学工学部建設学科教授を経て、現在、京都大学大学院都市環境工学専攻景域環境計画学教授。
- ・ 都市計画学会石川賞、サントリー学芸賞、土木学会著作賞、建築学会賞(業績)などを受賞。
- ・ 著書に「景観の構造」「日本の景観」「郊外の風景」「都市のデザイン(共著)」など。
- ・ 近年は、長野県景観審議会委員、近江八幡市景観条例策定懇話会委員、山口県景観形成懇談会委員等を歴任。

## 1 はじめに

「日本人の景色」と題して、日本人はどのような景色を育ててきたのかという視点からお話したいと思います。ちょっと変わったタイトルですが、話が終わった段階には、なるほどそういうことだったのかとおわかりいただけるかと思います。

## 2 『けしき』と『風景』と『景観』

### 景観に関わる3つの言葉

景観に関わる言葉は、たくさんあります。まず、『けしき』ですが、平仮名で書かれたり、「気色」あるいは「景色」という形で書かれたりします。「気色」は、中国から入ってきまして、日本では平安時代の初期には平仮名で「けしき」と大和言葉になりました。「景色」は、近世に入ってからよく使われるようになった言葉であります。

『風景』も中国から入ってきた言葉です。これは現在よく使われてはいますが、歴史的にはほとんど使われていません。漢文に堪能なインテリ層のみが使っていたようです。一般化するのには明治以降です。

『景観』は、歴史的の浅い言葉です。明治時代に *Landshaft* (ドイツ語)・*Landscape* (英語)・*Paysage* (フランス語) を翻訳するために、『けしき』や『風景』でなく『景観』としたのです。『景観』は、学術用語として、学術的な世界で使われていた言葉で、一般に使われるようになるのは1980年代でしょう。

### 『けしき』の2つの意味

「日本国語大辞典」を見ますと、『けしき』とは、「ものの外面の様子・有様と、外見から受ける感じ」とあります。外面の様子とそれからそこから受ける感じの両方を表現する言葉であるわけです。例えば、「風雲のけしきはなはだ悪し」(土佐日記)とは、何か天候が悪くなってきた状態を表現しています。「空の景色もうらうらと」(枕草子)でも、清少納言は外見の様子とそこから受ける感じの両方をよく表現していると思います。

『けしき』のもう一つの意味は、「外から観察することのできる心の内面の様子・有様」です。「院の御けしきのいとみじきなり」(源氏物語)というのは、院のご気分が非常にすぐれていることを表現しているのです。ですから、人間の表情や気分を表現する言葉でもあったわけです。



『けしき』は、だんだん分かれていきまして、ひとつめのほうの意味は、「景色」にだんだん特化していき、もうひとつのほうの意味は、「気色」（「キショク」・「キソク」）として、分化していきと言われております。今でも「キショクが悪い」という言葉が残っています。

『けしき』は、大和言葉として平安時代から使われている言葉ですから、日本の文献にもおびただしい回数で登場します。一般の人には、『景観』という言葉はなかなかよくわからないところがありますが、『けしき』というと大抵の方がうなずいて、納得してもらえらえるということがあるわけです。

### 3 景色として見る

#### 景色として山を見るから山の景色があるのだ

オギュスタン・ベルク氏（フランス：地理学者、風景学者）がこういうことを言っています。「山があれば山の景色があるわけではない。景色として山を見るから山の景色があるのだ」と。これは、大変なことを言ってるのです。

我々日本人はきれいな山があると、同時反動的にそれを景色として見る。日本人は、言葉を文字として表現するようになった頃からもう景色として山を見ていましたので、なかなかこういう認識はできないところがあります。

西欧人がアルプスなどの高山を景色として眺めるようになったというのは、18世紀からのことというのです。この話は我々にとっては驚くべきことです。景色というのは意識的に見る見方があって初めて見えてくるのだということをベルク氏が教えてくれるわけです。

何か対象があればもう景色があるんだと思うのは、間違いであります。人・地方・民族・時代など、見方に応じて、世界にはさまざまな景色があるわけです。

そうした視点から、ヨーロッパの人たちは景色などの研究をやっているわけですが、日本では、ついつい景色は昔からあるものだという認識があるものですから、こういう研究が少ないということがあります。



### 4 景色はいつ誕生したのか

#### 世界ではいつ誕生したのか

ベルク氏は、景色が世界でいつ誕生したのかということを研究しています。彼の説では、中国の六朝時代（4世紀）に世界で初めて景色を「発見」したのではないかとしています。それは、隠遁地の山水の風景ではないかと言っていますが、これについてはまた反論もあります。

### 日本ではいつ誕生したのか

では、日本では景色はいつ誕生したのか。「文学のきっかけになった景色」を、日本の古い文献で景色を描写している表現を抜き出していくことでわかるはずです。

例えば、「さい川よ 雲たちわたり うねび山 木の葉さやぎぬ 風ふかんとす」（古事記：イスケヨリヒメ（神武天皇の妃））は、確実に景色を捉えています。川から雲がたちわたってくる状態と、うねび山の木の葉がざわざわと動きだして、今まさに風が吹こうとしている、非常に微妙なところをちゃんと捉えています。

「やまとは 国のまほろば たたなづく青垣 山隠れる 大和しうるわし」（ヤマトタケルノミコト）も、大和の国の景色を非常に美しい形で表現しています。

大和絵では、非常に景色を美しく表現していますけども、それがいつごろから描かれていたのか。あるいは、自然の風景をなぞらえてデザインをした日本庭園が、いつごろからつくられるようになったのか。これについては、さまざまな資料を調べていかなければわかりません。日本で景色が誕生したのは、600年代、もしかしたら500年代に遡るのではないかと思います。

## 5 共有の環境文化としての景色

### 景色は共有することで文化になる

「この景色はすばらしい」と思っているだけでは、そこでもう消えてしまいます。それを言葉で表現する、あるいは、絵画に書きとどめるなどすると、ほかの人とその景色を共有することができるようになります。それで、だんだん文化になっていくわけです。景色は「共有の環境文化」と捉えたらいいのではないかと思います。

それから、物的な環境があれば即景色があるのだと思わないことです。物的環境を「景色」として見ない限り、物的環境は「景色」として見えないのです。



## 6 景色の育て方

### 私たちになじみのあるのはどんな景色か

景色を育てていくことを考えていくためには、「私たちになじみのあるのはどんな景色か」を再認識する必要があるのではないかと思います。そして、なじみのある景色をそれぞれの地域で良くしていく必要があるということです。そのためには、日本人のさまざまな景色の見方を振り返ってみる必要があるのではないかと思います。

### あなたの地域にはどんな景色が育っているのか

それから、「あなたの地域にはどんな景色が育っているのか、または、育っていないのか」をチェックしてみるというのも必要ではないかと思います。地域にふさわしい景色の育て方を考えていく必要があるだろうということです。



県の方でいろいろ考えていかれるということですがけれども、できるだけ多くの人たちが地域にふさわしい景色の育て方に関わって考えていかれるのが望ましいと思います。景色の見方と景色の育て方を考えていく「認識のプロセス」が非常に大事なのではないかと思います。

## 7 日本人はどんな景色を育ててきたのか

では、日本人はどんな景色を育ててきたのだろうかということで、以下の10の景色を今のところ考えています。これが適切かどうかわかりません。私の一つの仮説です。

- (1) 草木ものいふ気色
- (2) 神々と祭礼の気色
- (3) 国見のけしき
- (4) 四季と年中行事のけしき
- (5) 歌枕と名所のけしき
- (6) 洛中の景色
- (7) 文明開化・近代化の景色
- (8) 国立公園の風景
- (9) 生活環境の景観
- (10) 持続可能な景色

## (1) 草木ものいふ気色

---

### 日本人は、自然界と人間界を分けて考えていなかった

まず最初に、「草木ものいふ気色」です。これは、「景色」にならない前の世界ではないかと思えます。よく「気」という言葉を中国で使います。「気」があるとか、「元気」があるなどと言います。そういう「気」に関わっています。

『日本書紀』を読みますと、「草木ことごとく能(よ)く言語(ものいふ)ことあり」とか「巖根(いわね) 木の株(もと)、草の葉もなほ能(よ)く言語(ものいふ)」という表現があります。自然が話していたというのです。

西洋の人たちは、これを「アニマティック」とか「アニマティズム」などと言って、いわゆるキリスト教やそういう人格神を信じる宗教よりも劣った宗教と位置づけしています。

どうも、古代の日本人は、自然界と人間界を分けて考えていなかった。これは、現代にいたるまでの日本人の景色観に非常に大きな影響を及ぼしていると思えます。

例えば、木がものを言うように見える青景のイチガシ、宇佐八幡宮の巨樹、川棚のクスの木、河童と関連がある川の淵、神様・妖精・女神が出てくる話が残っている川の瀬などの景色に、そのような雰囲気を感じることはないでしょうか。



### 擬声語による表現

井上ひさし氏は、『忘れられない本』という本で、宮沢賢治が擬声語を使うのがうまいと言っています。

私の著書『日本の景観』の中でも引用した文章ですけれども、「私たちは日課のように裏山に出かけて行き、枝を渡る風の音や草のそよぐ音や滝の音を頭のどこかで聞きながら遊んでいた。しかし、それまで私たちは風が「どう」という音で吹き、草が風にそよぐときは「ざわざわ」で、くりの実が「ぱらぱら」と落ち、きのこが「どってこどってこ」と生え並び、どんぐりのびっしりとなっているさまを音にすれば、それは塩がはぜるときのような「パチパチ」と共通だとは知らなかった」と書いています。

宮沢賢治の童話を読むと、確かに擬声語がふんだんに出てきます。賢治は、先ほど言った草木言語(ものいふ)状態・気色を、擬声語で表現しているのではないのでしょうか。これは、我々にもわかる世界だという感じがします。



## (2) 神々と祭礼の気色

---

### 神を迎える祭りの気色

日本人は、太陽・月・雷・雲・風や、山・川・草・木など、天地の森羅万象に、八百万（やおよろず）の神が宿っていると考えていました。先ほどのアニミズムの世界がこういう形で神様が変わっていくということになります。同時に、そういう神々を迎えてもてなすというお祭りも行われるようになります。

例えば、那智の滝を見ますと、滝の上にしめ縄が張ってあります。滝そのものを神として見ているのです。

奈良の春日山（三笠山）は、円錐形の山ですけれども、円錐形の山には日本人は昔から神様がいてと考えて、「神奈備山」と呼んでいました。山の麓には、春日大社などの立派な神社が祭られています。そして、年ごとにこの山から神様を里にお迎えすることが行われます。それがお祭りであるわけです。

京都の祇園祭では、スサノオノミコトとその妃と息子が、八坂神社から神輿（みこし）に乗って出てきます。市中を練り歩いて、町の中の御旅所に鎮座します。それから、山車に移されて町内を巡って、疫病を追い払うお祭りになります。祇園祭は日本のいろんなところで行われて、山口県でも祇園祭が行われています。



### 都市の景色としての祭り

鎌倉時代初期の絵巻物に描かれている祇園祭では、棧敷に並んで神様が巡行していく行列を多くの人々が見物しています。この時代には、お祭りは一つの都市の景色になっていたと言ってもいいと思います。

日本の景色では、お祭りの景色と神々の景色というのは非常に重要なものではないかと思います。現在でも、相変わらずこういう信仰は残っているわけです。日本では、キリスト教圏などの一神教の世界とは違って、八百万の神様がいて、いろんなお祭りがあるところが特異ではないかと思います。

### (3) 国見のけしき

#### 自分の住んでいる所の景色を褒める

文献を見ていて、気がつくことですが、高い所に登って、自分の住んでいる所の景色を褒める歌がたくさん残っています。日本ではこういう国見の行事が行われていたのではないかと思います。

「大和には 郡山あれど とりよろふ 天の香久山 登り立ち 国見をすれば

国原は煙立ち立つ 海原は鷗立ち立つ うまし国ぞ 蜻蛉島 大和の国は」(舒明天皇)

(いろんな山々があるけれども、その中でも優れた天の香久山に登って国見をすると、国原には煙が立ち上っている。湖にはかもめが飛んでいる。何とすばらしい国か、蜻蛉島、大和の国は)

これは、国語の教科書で習ったことがあると思いますが、こういう類いの歌がたくさんあります。

#### 国見をすることから関心を

今の人もこういうことをやればいいのではないかと思います。何て汚い町だと思ふ体験を積んでいけば、その地域の人も景色にもう少し関心を持つのではないのでしょうか。

先ほど紹介しましたヤマトタケルノミコトの歌(「やまとは くのにまほろば たたなづく青垣、山隠れる 大和しうるわし」)では、大和は国の最も優れた場所だと、自分の住んでいる所を褒めたたえているわけです。周りを取り囲んでいる山々に取り囲まれた大和は何と美しいところだろうかと、謳っているのです。

山口県には、こういう場所はどこにもでもあるのではないのでしょうか。赤い瓦の集落を眺めながら、自然と一体になった自分たちの土地を褒める行事をやってみたらどうでしょうか。



#### 都市に対する日本人と西洋人の考え方の違い

空海が高野山に仏教寺院をつくるとき、「四面高嶺な平原の幽地」と言われる、蓮の花びらのような地形を選びました。天地の自然と一体になった都や住み処を褒めて、また、そういうところに住めることを寿ぐ(ことほぐ：祝いの言葉を述べて幸運を祈る)歌ではなかったかと思われます。

これは、どうも西欧の人たちが抱く都市の考え方とだいぶ違うのではないかと思います。初めに、日本人は自然界と人間界を分けていないという話をしました。ですから、都市も自然と一体のものだという捉え方がどうも根底にあるようです。

一方で、西欧人は、都市は人工的なもので、田園や緑地は自然のものだと、両者の間に線を引く。西欧人は、その都市に対して誇りと同時に、罪悪感も持っています。

罪悪感の根拠というのは、「都市は自然からの分離を意味し、神によって創造された自然の秩序に



対する人間の意思の押しつけである」という考え方が西欧ではあるようです。ですから、都市の建設は神の定めた秩序に対する干渉行為であるので、罪悪感をも伴っているようなのです。

けれども、人間が創造した世界だから、これを大事にしようという誇りもあり、矛盾した意識を都市に対しては抱いているというのです。

### 考え方の違いが都市の形成の違いへ

ヨーロッパの都市を見てもわかりますが、都市とは、人間の秩序でつくられた人工的な社会、つまり、人間界です。その外側は自然・田園です。

よく西欧の人たちが東アジアに来ると、都市がスプロールして、だらだらと大きいと言う。東京に来ると、どこまでが都市でどこまでが自然・田園なのかわからないと言う。バンコクに行ってもそうだし、フィリピンに行ってもそうです。アジア特有の現象だというのです。

自然と一体化しようという欲求は、ある意味で欠点であります。都市をスプロールさせるという問題点も持っているのです。

## (4) 四季と年中行事のけしき

---

### 四季の変化に敏感な感性

「四季や年中行事のけしき」こそが「景色」だ、と日本人のほとんどは思っているのではないのでしょうか。ですから、景観計画を立てる場合は、これが一番大事です。これをいかに組み込んでいくかということをやらないと、景観づくりは一般の人々に受け入れられないと思います。一部の物的な環境のデザインだけで終わってしまうと思います。



「形見とて 何か残さむ 春は花 山時鳥 秋はもみぢ葉」(良寛)という歌がありますが、日本人にとって、形見以上にかげがえのないもの、それが四季のけしきであったのではないかと思います。

我々の身の周りを、四季の変化として捉えていく意識が出てきたのは、いつごろのことでしょうか。古代文学者は、四季の歌の最初として、「春過ぎて 夏来るらし 白栲の 衣ほしたり 天の香久山」(持統天皇)を挙げます。白栲の衣が山に干されているのを見て、夏が来たことを謳っている歌です。白栲の衣は、けしきの変化を象徴するものになっています。

古代文学者は、こういう四季の歌にはどういう意味があったのかということも調べていて、宇宙の運行が秩序立って行われていることを寿ぐ歌ではなかったかと言っています。天皇が自ら夏が来たこ

とを祝福する歌を詠うことによって、季節の変化を告げたのではないかというのです。

### 景物の名所の変遷

『源氏物語絵巻』には、貴族の館の中庭で桜の花を鑑賞している絵があります。この桜の花のような季節の景物の名所がだんだん生まれていきます

江戸にも幕府が開かれて以来、さまざまな景物の名所がつくられていきます。全部で350カ所ぐらいつくられました。ウグイスの名所、梅の名所、ツバキの名所など、300年間に渡って、育てられていきました。

### 現在の景物について

山口県の観光案内等のホームページを見ると、四季の景物の名所がたくさん出てきます。錦帯橋そのものも景色ではありますが、やはり桜と組み合わせることで国民的な人気を得る名所になります。

それから、一の坂川の夜桜、あるいは、一の坂川のホタルなどもあります。ホタルも夏の訪れを告げる、代表的な景物です。

今では、棚田の景色も文化財に指定されたりしています。昔は景色として鑑賞するような世界ではなかったのですが、現在では一つの風物詩、季節の年中行事のように捉えられています。

宇部市のお茶祭りも一つの年中行事として、「景色」になっています。あるいは、七夕のちょうちん祭りや白狐祭りなど、季節にふさわしい景色ではないかと思います。



「宇宙の運行は、秩序立って行われている」ということをよるこび、祝福する人はいないでしょうけれども、季節が順調に運行していくことを願う心は誰にもあるのではないかと思います。

季節ごとに目覚めてくる、生氣ある山川草木を寿ぐという心、気持ち。それが、季節の変化に鋭敏で、風流な日本人の感性を育ててきたのではないかと思います。

## (5) 歌枕と名所のけしき

---

### 歌枕という日本文学の伝統

昔は歌に詠まれた名所を「歌枕」と言いました。そこを訪れて、歌に詠まれた景色を懐かしんで、故人を偲んで、感動を新たにして、自分もそこで歌を詠む。こういう文化があったわけです。これは、一部の階層の人たちではなかったかと思いますが、それが文化として残って、我々もそういう文化に

触れることで影響を受けてきました。

西行や芭蕉を、旅の文学者と言いますし、山口県には種田山頭火がいます。歌枕を訪れながら、古い歌と共感しながら、新しい詩歌を詠んでいくという日本独特の文学の伝統があります。

これは、西洋人のオリジナリティーを重視する文学観とか芸術観とは全く違う世界と言っているのではないかと思います。歌枕や連歌というものは、そういう伝統を残しているものではないかと思えます。

### 平安時代の名所とやまと絵

平安時代にはどんな名所があったかということ、これは旅に行ったときに詠まれた場所にあたります。そこはどんな場所かということ、「山」が多いです。次に、「河」、「浦」、「原」があって、それから、「里」、「橋」、「神社」、「道路」、「関所」、「井戸」があります。昔の観光名所はこういうところでした。

名所の景色は、やまと絵として描かれていて、障子絵や屏風絵という形で残されています。やまと絵を分類した絵画関係の本を読みますと、やまと絵の画題は3つあったようです。

一つは、「四季絵」です。それから、「月並絵」は、1月から12月までの景色を描きます。障子や屏風に描きます。それから、「名所絵」で、「住吉の浜」など有名な所を描きます。



この3つがやまと絵に描かれていたということは、日本人は風景をこの3つで捉えていたということになります。四季、そして月並というのは年中行事です。それから、名所。この3つが「日本人にとっての景色」であったのです。

現在では、非常に多様化していると言ってもいいと思います。さまざまな名所があります。ディズニーランドも名所になっています。

## (6) 洛中の景色

---

### 生き活きとした生活を描く

洛中(都市)の景色がいつごろから描かれるようになったか、まだ定説がありません。いろいろ調べたのですが、どうも「洛中洛外図」が最初ではないかと今は思っています。

応仁の乱後の京都の絵を描いた「洛中洛外図」は、1500年代にいろいろ描かれました。その絵を見ますと、京都の四季と年中行事、それから、京都の名所も描かれています。

もう一つ重要なのは、町の中を描いているということです。京都の町並みとそこでの人々の生き生きした生活が描かれているんです。これは、今まで主題として描かれるということはなかったと思います。

初めて、通りの様子、つまり、町の景色が登場したのではないかと思います。家と店と通りの一体化した関係、非常にいいですね。夜店などでもこういう雰囲気がありますが、普通の店でも一体化していたわけです。日本の町の原型、原風景みたいなものではないかと思います。

最近、店と通りが隔てられてしまって、通りと店とのこういう生き生きした感じはなくなってしまいました。これは西洋にもありません。壁がしっかりしていますから、家の中と外との関係が開放的ではないのです。こういう感じは、今は門前町や市場などで味わうことができます。

### 国見絵の新しい形 ~町のにぎわい・庭・郊外の山水~

京都の町は、応仁の乱以降、その基本形がずっと残っています。戦災にも遭いませんし、少し大火などはあるでしょうけど、先ほどのような店頭の風景がそっくりそのまま残っている。非常に小さい単位で店が並んでいるわけです。これがまた京都の通りの魅力で、観光地らしいにぎわいを創り出しています。

絵図で見ますと、町の中にたくさん木が生えているのがわかります。これは坪庭や前栽です。京都の人たちは、「市中の山居」と言って、町の中に住みながら山住まいをしていると気取っていたわけです。坪庭や前栽が町の中にあって、郊外にも、山や川があって、そこには、多くの人でにぎわっている社寺などの名所が点在していました。

これは、新しい国見絵ではないかと思います。ここには、日本の景色のエッセンスが揃っているという感じがします。そういう意味で、「洛中洛外図」は非常に興味深い絵ではないかと思います。

## (7) 文明開化・近代化の景色

---

### 西洋の透視画的景色と日本の多感覚的景色

近代に入ってから、洋館、鉄道、鉄橋、汽車、駅、電柱など、文明開化・近代化を象徴する景色がつくられています。日本人は新しく入ってきたものを神様みたいに崇拜するところがありますので、物神化していきます。「ザンギリ頭をたたいてみれば、文明開化の音がする。チョンマゲ頭をたたいてみれば、因循姑息の音がする」という時代になっていきました。

銀行も名所になるわけです。第一国立銀行では、テラスに人が上って、そこには遠眼鏡が置いてあったりして、銀行が清水寺などと同じような場所に変わっていくことになります。日本人は、こうい

う新しいものには乗りやすい。

それから、銀座煉瓦街では、透視図のような街並みができました。これはロンドンのリージェント街を真似たというふうに言われていますが、外国人が設計した町です。日本人は、住まなかったようで、ほとんどが新聞社などのオフィスの利用、あるいは射的場などの遊びの場所として使われたようです。

こうして、透視画的な西洋の景観が入ってきます。西洋の人たちは、透視画の発見と同時期に、景観や景色を「発見」と言われています。「景色 = 透視画的な世界」という見方が1400年代から1900年まで500年間、西欧では続きます。



西洋では、透視図的に造形した都市でないといえぬ気が済まないというところがあるようです。日本は、多感覚的景色であって、こういう町並みとは違います。明治以降、透視図的な造形が日本に入ってきますが、一般化するわけではなくて、一部のところに取り入れられるにとどまりました。

## ( 8 ) 国立公園の風景

---

### なぜ、西欧人は風景を「発見」できたのか

同じ時期に「国立公園の風景」が日本に入ってきます。最初に言いましたけれども、18世紀に西欧の人たちはアルプスの山々を見て、それを美しい景色だと思ったわけです。それまでは、通行を妨げるところであるとか、おできやこぶみみたいなところという見方をしていた、どうしようもないものというふうに見ていたようです。これは、西欧人がアルプスの風景を「発見」していった歴史を克明に研究した本に描かれています。

では、西欧人がどうしてアルプスの風景を「発見」することができたかという、地質学と植物学という2つの学問の発達があったと言われています。



どうして、アルプスができたのか。そういう地質学的な知識・研究が進んでいくことによって、人々はアルプスに非常に興味を持っていくようになる。

それから、植物の分布も、低地から上に行くにしたがって変わっていきます。そういうものに非常に興味を持って、植物学者や地質学者ばかりでなく一般の人も山に登っていくようになった。登山に行く人たちの、ピッケルやコンパス、地図、メモ帳などを持つ姿は、理科系の科学者たちに原型があ



るのです。

### 崇高美への関心

それから、この時代は、西欧で崇高美に関心が持たれるようになったと言われています。学問とこの新しい美学があって、アルプスの風景は自然の聖堂や祭壇のように見られるようになったということです。探勝的な風景が「発見」されていくのです。

日本にもそういう知識が入ってきて、日本アルプスが「発見」されていきます。ほとんど関心を持たなかった山が、日本アルプスという形で意識されていくようになる。今では、登山家のメッカになっているわけです。

それから、崇高な自然を国立公園として保護していく考え方も出てきて、日本では昭和9年から11年にかけて瀬戸内海とか雲仙、霧島、阿寒、大雪山などが国立公園に指定されるということになります。

### 日本における探勝的風景観の起こり

明治以降、日本の風景論は、探勝的・理科的な風景論になります。この時代の風景の本は、理科的な解釈で日本の景色を説明しようとしています。

代表的な本が志賀重昂の『日本風景論』です。明治27年に出て、ベストセラーになります。日本の風景がいかに優れているかを書いた本で、日本人のナショナリズムをくすぐってベストセラーになりました。ちょうど日清戦争の時期と重なりました。

日本は、(1)気候海流の多変多様なる事、(2)水蒸気の多量なる事、(3)火山岩の多々なる事、(4)流水の浸食激烈なる事、それ故に、日本の景色は優れていると説明しています。全部理科的な説明です。ですから、今までの日本人の景色の見方とは違うものでした。

『日本風景論』に載っている挿絵も、「山に桜」や「山にホトトギス」という、今までの日本的な情緒のある世界とは違う世界が描かれることになります。そういう新しい風景観が出てきたのです。

摩周湖は、人跡未踏の地の探勝的な風景です。その良さは、どうしてこの湖が生成されたのかという自然科学的な知識とともに学んでいくことになります。秋吉台もそうです。科学的な知識で見ればおもしろいのです。そういうおもしろさは、ヨーロッパの人がアルプスの風景を「発見」したのと同じで、科学の発展があって、それで初めて秋吉台的な自然環境が「風景」になっていったのです。長門峡などの渓谷や秋芳洞などの鍾乳洞も、理科的な知識があってこそ、おもしろいのです。

多くの観光地のホームページを見ると、こういう自然公園的な風景がよく挙げられていると思います。その背景には、探勝的・理科的な風景観があるのです。

## ( 9 ) 生活環境の景観

### 「景色」から「景観」へ

高度成長期以降の昭和40年代、「生活環境の景観」というのが注目されるようになってきます。公害問題がきっかけになったわけですが、水質汚染、騒音、大気汚染など、身近に五感で感じ取れる世界に、日本人が非常に敏感になった時代ではないかと思います。自然保護、歴史的環境の保存など、高度成長の環境破壊に対抗する形でいろんな考え方が出てきます。それに伴って、緑化推進や親しめる水辺の再生、アメニティーと景観などに関心が高まっていったと言っているのではないかと思います。

日本中のさまざまなところに、景観条例などができていくのもこの時期です。1970年代から80年代のことです。この時期に、「景色」あるいは「風景」と今まで使われていた言葉が「景観」という言葉に変化をしていきます。街路景観、住宅地景観、商業地景観、工業地景観、都市景観、農村景観といったさまざまな身近なものの物的な整備に、関心が向いていった時期ではないかと思います。



従来の「景色」や「風景」は、自然の景色、風景という色彩が強かったけれども、「景観」という言葉には、そういうイメージがなかった。何を言っているのかよくわからないけれど、「住宅地風景」あるいは「住宅地景色」というよりも「住宅地景観」といったほうが何か収まりがよかったです。

### 生活環境の景観のいろいろ

例えば、古い宿場町を保存していこうと動きが出てきます。大きな理由は、自動車時代になって、道路を拡幅しなければならない。両側の建物を壊さない限り、道路を拡幅できない。それで古い町並みが日本中から消えていきました。こういう町並みを保存しようという運動が出てきて、萩市の町並みや下関にある近代化遺産と言われる建物も保存されるようになっていくこととなります。

それから、大都市では歩行者に対する整備が進められていくわけです。広場であるとか、ゆったり人が散歩できるような道が横浜などで整備されていくことになり、日本中に影響を及ぼしていくこととなります。

川をできるだけ親しめるようにしようということで、一の坂川のように親水性の整備がなされていきます。それから、水辺



には桜が植えられます。ホテルも再生していこうということで、一の坂川のホテル整備護岸は、生態的な河川整備ということで、日本中に大きな影響を及ぼしました。

それから、近代的な関門橋や瀬戸大橋などの橋がつくられていきます。公共施設の整備についても景観整備に気を遣われるようになってきましたし、また、ザビエル教会堂のような現代建築の名所がいろんな都市に造られていきます。

### 国法不在の時代であった

この時代には、景観に対する国の法律はありませんでした。あったのは、「古都保存法」、「公害対策基本法」、「伝統的建造物群保存地区制度」、「文化財保護法」くらいです。今振り返って見て、最もよく機能したのは、やはり法的バックグラウンドのある整備でした。



条例は、住民主体のまちづくりを進めていくという良い蓄積ができたので、高く評価できると思いますが、条例ですから、国法の上に出ることはできないため、いろいろ制約がありました。

ようやく「景観緑三法」が通常国会に上程され、景観関係についても国法ができつつあるということで、好ましいことではないかと思えます。ただ、それをどう活かしていくかというのは、やはり地域の人たちの取り組み如何ではないかと思えます。

## ( 1 0 ) 持続可能な景色

---

### 将来の世代のニーズを損なわない開発を考える

1990年代に持続可能な開発という概念が出てきました。これは日本から出てきたわけではありません。「持続可能な開発=今の豊かさがずっと続いていく」と、誤解している人がいます。



今の世代のニーズだけではなくて、将来の世代のニーズを損なわないような開発を考えていく。そのために、多様な資源や可能性を将来残すようにしていかなければいけないという考え方です。我々の生き方を問う、価値のある概念ではないかと思えます。

これは、景観、景色にも言えることではないかと思っています。この考え方を景色に当てはめます

と、「さまざまな景色、あるいは、さまざまな景色の見方をできるだけ将来に残すような開発をやっていくべきだ」ということではないだろうかと思います。

## 8 まとめ

ここで挙げてきたさまざまな景色の見方や育て方があるわけですが、最初に述べたように、「**私たちになじみのある景色がどんな景色か**」を再認識してみる必要があるのではないかと思います。山口県ではどうなのかと、景色の見方をもう一度振り返ってみる必要があります。

それから、「**あなたの地域にはどんな景色が育っているのか、または、育っていないのか**」をチェックして、地域にふさわしい景色の育て方に関わる条例をつくるといった構想もぜひ考えていただきたいと思います。

私の話が、皆さんのこれからの景観づくりや景観育てをやっていく際に、役に立ってくればありがたいと思います。長くなりましたが、これで私の話は終わりにしたいと思います。長い間ご清聴ありがとうございました。

